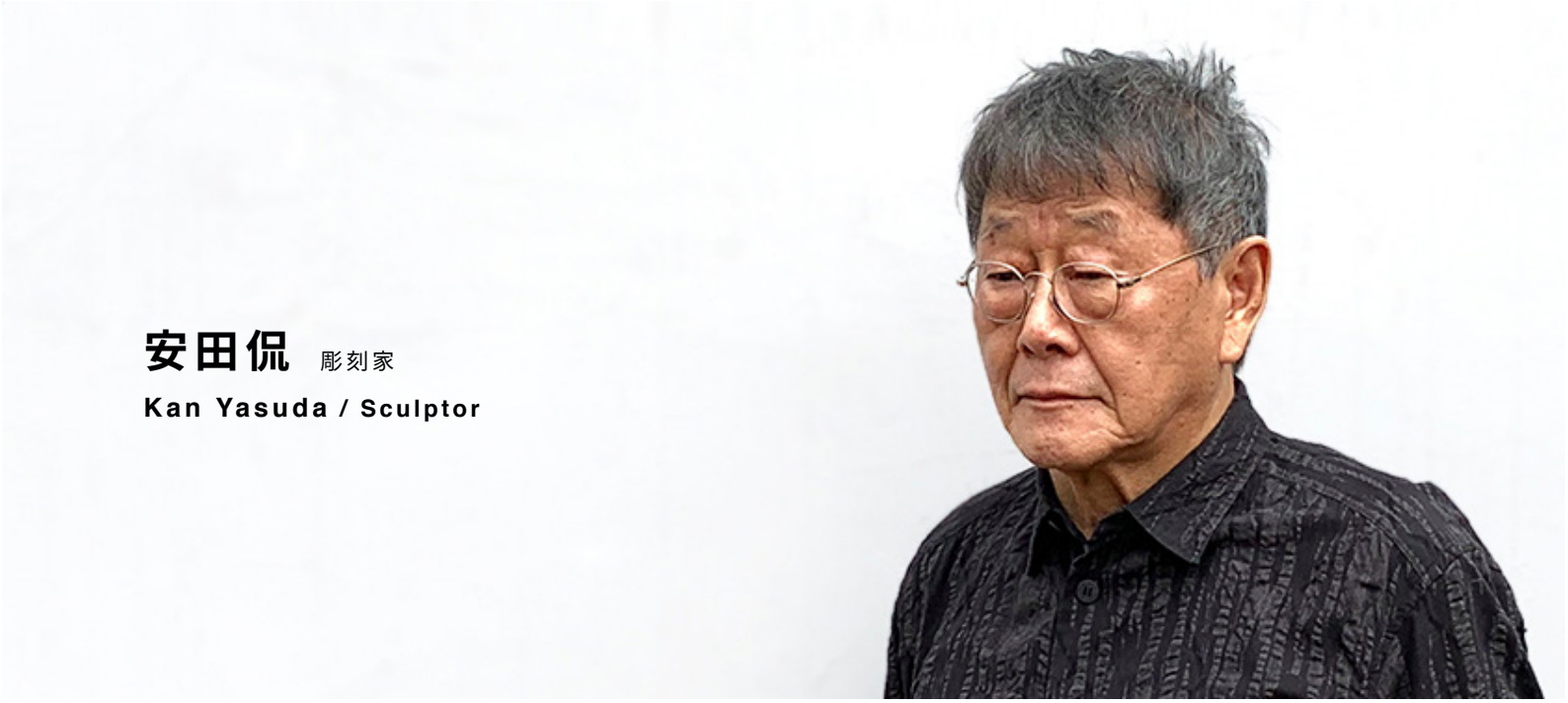
六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



安田侃 彫刻家

Kan Yasuda / Sculptor

CREATOR INTERVIEW NO 122

安田侃　Kan Yasuda

1945年北海道美唄市生まれ。1970年イタリアへ渡る。ローマ・アカデミア美術学校でペリクレ・ファッツィーニ氏に師事。以降、大理石の産地として知られるトスカーナのピエトラサンタにアトリエを構え、大理石とブロンズによる彫刻の創作活動を続けている。故郷の美唄市に安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄がある。主なモニュメント設置場所に、東京ミッドタウン、東京国際フォーラム、札幌駅JRタワー、創成川公園、洞爺湖畔、セゾン現代美術館、酒田市美術館、朱鷺メッセ、ベネッセアートサイト直島、宮崎県立美術館（以上日本）、ブリッジウォータホール（マンチェスター、イギリス）、ガラチーコ（カナリア諸島、スペイン）、オーロラプレイス（シドニー、オーストラリア）、APECナルパーク（釜山、韓国）、シティーガーデン（セントルイス、アメリカ）、トラヤヌス帝の市場（ローマ、イタリア）、ボーボリ庭園（フィレンツェ、イタリア）など。

NO 122

安田侃 彫刻家

KAN YASUDA / Sculptor

彫刻と音楽とともに“時”を感じる。

クリエイターインタビュー

『彫刻の周りでコンサートを』

published_2020.10.28 / photo_tada / text_akiko miyaura

イタリアのピエトラサンタを拠点に活動する、世界的な彫刻家・安田侃さん。冷たく無機質に思える“石”に、安田さんが命を吹き込むとゆっくりと呼吸を始め、体温をおびていく――。流線を描く美しい彫刻は宇宙を内包しているような壮大な空気をまといながらも、すぐ隣にいるような優しさと温かさを持っています。なぜ、そんな彫刻を生み出せるのか。東京ミッドタウンに常設されている作品《意心帰》と《妙夢》に込めた思いをきっかけに、安田さんが思うアートの役目、街づくりの課題、そして彫刻を通じて成し遂げたいことをじっくりと伺いました。

ヒューマンサイズの彫刻がもたらすもの。

1991 年からミラノやフィレンツェで街並みを使った個展（野外彫刻展）を重ねてきました。イタリアはローマ時代から街中に彫刻が溢れている、パブリックアートの原点です。彫刻を置くことで街の歴史を再認識し、文化を豊かにするきっかけが生まれることを、身をもって感じていました。そんな時、アートディレクターの清水敏男氏とポンピドゥー・センターの元館長のジャン＝ユベール・マルタン氏から六本木のミッドタウンでのアートワークのコンペに参加しないかと声をかけていただきました。それが、私が東京ミッドタウンに関わることになったきっかけです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

そして、作品を展示する予定の場所を自分の目で見た上で、イタリアに戻り大理石で《意心帰》のミニチュアをつくって、コンペのプレゼンに持っていったんです。すると、審査員の方々がミニチュアを両手で持って、とてもニコニコされたんですよ。《意心帰》を気に入ってくださったようで、結果、私たちはコンペを勝ち取ることができました。何より、私の作品を選んでくれたことが嬉しかったのをよく覚えています。

意心帰

2006 年に安田さんが制作した作品で、東京ミッドタウンのプラザ B1F に設置されている。数十億年の時を経て生まれた大理石を、滑らかな曲線で削り出し、太古の地球の息遣い、人間の温もりを表現。

現在ミッドタウンには、私の作品が 2 点常設されています。一つが、プラザの地下にある《意心帰》。白い石を家に置くと、幸運が舞い込むという言い伝えを聞いたことがあるのですが、ずっと大理石に触れてきた私としては、とてもいい話だなと思ったんです。それなら、地下に白い大理石を置こう、と。まるでその下の地球の一部に触れる感覚の場所になれるかもしれないと思いました。

もう一つの《妙夢》は、正面玄関ともいえるプラザの 1 階の屋外にあります。そこは、とても広い空間でバックには巨大な建物が立っている。実は人ってあれだけ大きな建物を前にした時、どこか恐怖を感じるものなんです。そこに人間より少し大きい " ヒューマンサイズ " の彫刻が一つあるだけで、ずいぶんと空気が和らぐ。特に私の作品は台座がないので、触れられる高さにあるんです。かつ、地球の一部であるブロンズや石を使った、優しい流線形の作品があることで、温もりを感じることができるんですよね。

妙夢

《意心帰》と同じく、安田さんによって 2006 年に制作されたブロンズ作品。作品の中央に開いた円環は、人々が夢を描き、願いを込めるためのもの。また、刻々と移りゆく太陽の光と影によって、彫刻の姿、見え方が変化する。

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

パブリックアートは人と精神性を共有できる。

現代の建物の多くはガラスで覆われ、骨組みにはステンレスやアルミといった材質が使われているので、どこか冷たさを感じるのは否めない。そういった無機質な世界に、ポンとヒューマンサイズの彫刻を置くと、一転、とても精神性のある空間になるんです。精神性というと難しく聞こえるけれど、要はうれしい、楽しい、哀しい、つらいといった人の感情のこと。彫刻と人は、そういった精神性を共有できるもの。もっといえば、万人と共有できる本質的なものを持った彫刻こそが、パブリックアートだと私は考えています。

私の彫刻に対して、挨拶をする人が時々いると聞くんですよ。会社に通う道すがらに作品があれば、何年、何十年もの間、同じ彫刻を毎日見ることになる。すると、いつしか彫刻が生きているように感じ、両者の間に関係性が生まれるんです。それで、声には出さずとも朝は「おはよう」、帰りは「さようなら」と声をかけるようになる。彫刻は雨の日も風の日も、何の文句も言わず、そこに立っています。彼らは " ある " のではなく、" いる " んですよ。その感覚がわかる人だけが、嬉しさや哀しさを共有することも、会話をすることもできる。彫刻も毎日みなさんを見ていますよ、じっと（笑）。

また、《意心帰》と《妙夢》には、同じくらいの大きさ、似たような形の穴が開いています。外に立つ《妙夢》の穴は光を通し、夢を描く空間をつくり出す。そして、《妙夢》のすぐ隣にあるガラスの天窓を通して地下にもぐり、《意心帰》という地の中へ入っていく。つまり、天の光と地の石は、穴という同じ空間を通じてつながっているんですよ。ほとんどの人は気づかないけれど（笑）、まれに本能的につながっていることを感じ取る人がいて。見破られると、私はとても嬉しい気持ちになるんです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2020.10.28 / photo_tada / text_akiko miyaura

子どもたちが教えてくれる " 越える " ということ。

もう少し穴の話をすると、《意心帰》に彫ったのは地球の中に身を寄せることができる、洞窟のような穴。通りかかったことがある方は、穴に入った子どもがなかなか出てこず、お母さんに「もう帰るよ。出なさい!」と怒られている光景を見たことがあるのではないでしょうか。それくらい、あの穴の中って心地よいんです。なぜなら、母親の子宮と同じ形だから。穴のすみに隠れて中からのぞくと、地球の外側を見ているような気持ちになる。それでいて、まわりを石が囲んで防御してくれるから安心感があるんです。

《意心帰》だけでなく、私の作品に触れた世界中の子どもたちは、みな同じような行動をします。時々「安田さんの作品は、なぜ子どもが触りたくなるんですか?」と聞かれますが、私から「触ってくれ」とお願いしたことはないんです。ただ、今の社会って一歩家を出れば触ってはいけないものだらけで、小さい頃から「触ってはいけない」と教えられるじゃないですか。でも、子どもにはわかるんです。「これは触ってもいいんだな」と。私の彫刻を見つけた子は、遠くの方から「触るぞ」「入るぞ」と言わんばかりに作品に近づいてくる。だんだんと足早になって、ついには親の手を離して走り寄ってくるんです。子どもたちは本能で彫刻に触れ、登り、入っているんですよね。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

《意心帰》とピサの斜塔

2016 年にイタリアのピサで行われた展覧会でも自然と子どもたちが集まり、遊んでいた。

よく「芸術は国も人種も宗教も超える」なんて言うじゃないですか。言葉にすると美しいけれど、現実的にはなかなか難しい。でも、本能で作品に触れる子どもたちの姿こそ、国も人種も宗教も超えることを体現しているように思うんです。まったく文字も読めない、言葉も分からない、文化も知らない子どもたちが、理屈じゃなく同じ感覚で、作品に触れている。そうやってすべてを超えることが、アートの重要な役目だと思います。

生きた石が持つ 2 つの時間軸。

《意心帰》の石は、私が 49 年間住んでいるイタリアのピエトラサンタから運んできました。ピエトラサンタは彫刻のメッカと言われ、多い時には世界中から 200 人以上もの彫刻家がやってくる街。山のふもとにある私のアトリエからは、石切り場がよく見えるんです。実はその石切り場は、ミケランジェロが石を探しに通っていた場所でもあるんですよ。仕事の合間にふと顔をあげて、真っ白な石が広がる光景を見ると「ミケランジェロも、あの場所で苦労しながら仕事をしていたんだな」なんて感慨深くなり、勇気をもらいます。彫刻家にとって、夢のような環境。世界で一番好きな街はどこかと聞かれたら、私は迷わずピエトラサンタと答えるでしょう。

石切り場

安田さんのアトリエからも見える、世界有数の石切り場。大理石でできている山の山上に位置する石切り場からは、かつてミケランジェロも彫刻の素材として求めたという、格別に美しい大理石が採れる。ピエトラサンタは、北イタリアに位置する、トスカーナ州ルッカ県にある美しく静かな地方都市。安田さんは 1974 年より居住し、アトリエも構える。写真は、ミケランジェロが原石を求めて通った石切り場。

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

ローマは、とにかく石だらけ（笑）。2000 年も前から存在している彫刻が、当たり前に街のあちこちにあるんです。彫刻家は、そういった作品の親みたいなもの。だから、いつも私は手放す時に「ここの空気を吸って、長く生き続けてね」と送り出しています。石は一度置かれたら、何十年、何百年 ..... ひょっとしたら、何千年と同じ場所で生きていかなくちゃならないんですから。ミケランジェロのダビデ像ですら、まだ 500 年程度。ついこの間、見てきたところですが、まだまだ彼は生きそうだなと感じました。だって魂が宿っていますから、あの彫刻には。

ダビデ像

ミケランジェロが 1501 年から 1504 年にかけて制作した彫刻作品。ルネサンス期を代表する傑作として名高い。素材となった大理石は、カッラーラの石切り場からフィレンツェまで、莫大な人件費と輸送費をかけて運ばれたという。アカデミア美術館にて収蔵。

彫刻を通して感じる時間には、" 継続する時間 " と " 瞬間 " という 2 種類が存在していると私は考えています。" 継続する時間 " は、彫刻そのものが存在する時間。何千年もの間、街や人々を見続けてきた彫刻だけが持つ、時間の長さみたいなものですね。その中に、彫刻と人間がコンタクトを取り合う " 瞬間 " がある。たとえば、幼い頃に《妙夢》や《意心帰》に触れた子どもが、30、50 年後に再び作品を見た時、「この石に触れたことがある」「この穴に入った気がする」と懐かしく思うはず。その時には彫刻に触れた " 瞬間 " と同時に、何十年と " 継続してきた時間 " が存在している。それは彫刻とその人だけの時間であり、コンタクトを取れる人だけに与えられた楽しみなのです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2020.10.28 / photo_tada / text_akiko miyaura

厳格なルールのもとに成り立つイタリアの街づくり。

私が住むイタリアには、街づくりに関して厳しいルールがあります。実は私がアトリエを建てる時、市役所の許可がおりなかったんですよ。屋根の素材から瓦の色、壁の色、窓のサッシまで、すべて規定を守ったはずなのに承認されない。話を聞くと、雨どいの素材がダメだと言うんです。今もアトリエの修復をしていますが、「プラスチックの雨どいじゃ、イタリアらしい田舎の風景を壊すから、昔ながらの銅を使ってください」と。北から南まで統一されたイタリアの街づくりは、そんな厳格なルールのもとに成り立っている。ある意味、みんなが我慢をして、勉強もして、お金をかけてあの風景をつくっているんです。

安田侃彫刻美術館　アルテピアッツァ美唄

イタリアのピエトラサンタに構えるアトリエの他に、生まれ故郷である北海道の美唄には、山々に囲まれ閉山した炭鉱街の小学校跡地に、大人も子どもも心を広げられる広場をつくろうとの思いから設立された『安田侃彫刻美術館　アルテピアッツァ美唄』がある。自然と人と芸術の新しいあり方を目指し、いまなお創り続けられている彫刻美術館。
撮影：小川重雄

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

アートの街の象徴は戦いの末に生まれた。

ヨーロッパの中だとパリもゾーンを決めて、建築物に対して厳しい法律を設けていますよね。ただ、その中にもポンピドゥー・センターのような、挑戦的な建物が存在しているのもおもしろいところ。ポンピドゥー・センターは、私も一緒に仕事をしたことがあるレンゾ・ピアノによって設計された建物。名前を冠したポンピドゥー大統領夫妻は、最後までレンゾの味方でしたが、当初は多くの人々が建設に反対したと言います。さまざまな戦いを経て生まれた美術館で、この美術館一つで、今なおアートの街・パリを支えているという存在感がある。レンゾの思い切った挑戦は、その後ヨーロッパ各国のアートに影響を与えました。

ポンピドゥー・センター

1977 年、パリにて開館した総合文化施設。近現代芸術の拠点としてジョルジュ・ポンピドゥー大統領（1969 - 1974）によって構想が発表され、レンゾ・ピアノ、リチャード・ロジャースなどが設計を担当。

古い街並みはちゃんと残し、新しい挑戦はしながらも決まったゾーンには建物の色や高さなどの規定を設ける。そういったトータルの街づくりが、ヨーロッパの素晴らしい風景を守っているんですよね。でも、日本には残念ながら、そういった法律や大きな仕組みがまだない。イタリアに住んでいて、そこは大きな違いを感じる部分です。

アイデンティティを残しながら新しい街をつくる。

もともとは日本の街並みも、とても素晴らしいものだったんです。江戸時代の頃なんて統一感もあって、ヨーロッパの美しい街に匹敵する …… いや、それ以上ともいえる空間がありました。ただ、戦争や地震、火事などの影響を受けて、まったく新しい街をつくらざるを得なかった。今も浅草や上野、谷中など、昔の風景を守りながら頑張っている街もあります。そうやってアイデンティティを残しながら、建築が新しい街づくりをリードする仕組みをつくることが、今後の日本の一つの課題だと思います。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2020.10.28 / photo_tada / text_akiko miyaura

イタリアならではの試みを東京にインストール。

これまでさまざまなパブリックアートに関わってきましたが、中でもイタリアの 8 都市で行った彫刻展は非常に印象的。それぞれの市が主催者となって中心街に入る車を止め、街全体を使った展覧会をしたんです。それを東京でぜひやってみたい、というのが私の夢の一つ。できることなら、銀座がいいですね。今も土日は歩行者天国になっているので、それを3ヶ月に伸ばすだけでいいんです（笑）。東京は街中で何か特別なことをするのが、非常に難しいと言われる都市。普通に考えると、提案の実現は不可能かも。でも、不可能の一言で片づけず、思い切った改革ができれば、東京の街がまた生き生きと息を吹き返すんじゃないかと思います。

8 都市での彫刻展

ミラノ、ピエトラサンタ、フィレンツェ、アッシジ、ローマ、タオルミーナ、トリノ、ピサと 8 都市の街中に、数々の彫刻作品を点在させた展覧会は多くの人に驚きと感動を与えた。

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

1991 年のミラノに始まり、2016 年のピサまで、それぞれの都市は、個性豊かで歴史も文化も異なり、8 都市での展覧会を通じて多くのことを学んだ 25 年間でした。フィレンツェではルネッサンス時代の広場のみ8箇所が会場に充てられました。ローマではフォロ・ロマーノの一画、世界唯一の古代遺跡美術館・トラヤヌス帝の市場が会場で、目に見えない、形もない『時に触れる』という展覧会タイトルが付けられました。さらにローマの展覧会では「2000 年前の遺跡の中に抽象の現代彫刻が立つ姿は、過去と現代と未来を結ぶ何かを感じさせる」と評価され、その場にホワイトブロンズの《意心帰》一点が永久設置されることに。イタリア人とイタリア文化の深さと重さに感動させられました。

ホワイトブロンズの《意心帰》

トラヤヌス帝の市場に永久設置になったホワイトブロンズの《意心帰》。後ろに見えるのはヴィットリオ・エマヌーレII世記念堂。

それから、次に話すアイデアはすぐにでもできるんじゃないでしょうか。東京ミッドタウンの《意心帰》の周りで、ぜひコンサートをやってほしいんです。今はコロナ禍で、若い人たちの発表の機会が減っている。いくつかの音大に声をかけて、順に学生たちに演奏してもらえば、彼らにとって肝試しのような場にもなります。彫刻と音楽って、すごく相性がいいんですよ。ひょっとしたら、演奏会よりも早く来て《意心帰》の穴に入ってしまう人がいるかもしれないね（笑）。あの中で寝転がって音楽を聴くって、最高だと思いますよ。

アートは泣かせてなんぼ。心を映す鏡である。

音楽と言えば、私はトッレ・デル・ラーゴのプッチーニ財団と、10 数年前からオペラの舞台美術の仕事をしています。財団の方から Kan の彫刻には死と愛、生と哀しみが内含している、この4つがあれば蝶々さんの魂は表現できるとおだてられ、オペラ「蝶々夫人」の空間をつくりました。たった4つの彫刻がポツンと置かれた舞台で、歌を歌うだけ。つまり、蝶々夫人の悲しい物語を完全に抽象化したんです。" 日本人はこうだ " と説明する視覚的要素を一切取り払った時、蝶々夫人の愛が普遍的な愛となり、その魂はお客さんにストレートに届きました。過去 100 年間変わることのなかった舞台への新たな挑戦に対し、うれしいことにジャコモ・プッチーニ賞をいただきました。ちょっと自慢に聞こえてしまいますが、オペラ歌手のマリア・カラスと同じ最高の賞なんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

蝶々夫人

ジャコモ・プッチーニ作曲の名作オペラ。アメリカ海軍士官ピンカートンと武家の娘だった蝶々さんの悲恋を描く。安田さんは 2000 年、舞台美術を手掛ける。ドイツ、アメリカ、日本、韓国でも上演され、イタリアではまだ上演が続いている。

トッレ・デル・ラーゴ・プッチーニ野外劇場にオペラを観に来るお客さんって、毎年同じ演目を見ているはずなのに、みんな泣くんですよ。公演後には、大の大人たちが「あんたは泣いた？」「泣けたよ」「あらいいじゃない。私は泣けなかった」なんて、言い合いっこをしているんです（笑）。要は、蝶々夫人の物語に自分を反映させた時、泣けた人は「あんた、いい人生送っているじゃない」ということなんですよね。逆に泣けなかった人は、「大した人生を送れていないから、今年は泣けなかった」と。これこそがアートだと私は思うんです。

アートは、泣かせてなんぼの世界。そのために、物質にいかに精神性を宿すことができるか、どうすれば彫刻という一つの形態を使って、人の気持ちを受け止めたり、慰めたりできるのか。私なりに考え続けた結果、その人の心を映す鏡になれば、それが可能だということがわかってきたんです。心を映せば、自分の中の悲しさも苦しさも楽しさもよろこびも見える。映すだけなので慰めるのは自分しかいませんが、悲しいということを知る、楽しいということを知るというだけで素晴らしいじゃないですか。見た人の心を映し、その人が自分の中にある精神性を知る。それがアートの大切な役目であり、本質だと私は思っています。

取材を終えて ……

日本を代表する彫刻家に対して、失礼を承知で言わせていただくと、安田侃さんはとびきりチャーミングな方。撮影では自身の作品《意心帰》の穴に慣れた様子でゴロリと寝ころび、「自分で彫ったから、どれだけ心地よいかわかってるの」と笑う。また、スタッフが資料をクラフト紙にプリントアウトしたものを見て、「私もそっちの紙がよかったな〜」と微笑む。純粋な少年性をどこかに残していらっしゃるからこそ、あんなにも汚れのない精神性を持って深くアートを考察し、奥底で石と繋がれるのだと感じました。(text_akiko miyaura)

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.